

「わたし」 (言葉) 「あなた」

前号に続いて人と人の中にある言葉の働きについてのことです。

まずは言葉について、いきなり余話ですが・・・。

余話 1 昔太閤秀吉が四国の長曾我部を攻撃しようとしたときのこと。

瀬戸内海を渡る用意をしたのですが、モタモタして一向に腰が上がらない。

それをからかって人々はこんなざれ歌を詠みました。

「太閤は四石(四国)の米を買いかねて、今日も五斗買い(ご渡海)明日も五斗買い(ご渡海)。」

- 1石は10斗、1斗は10升 -

余話 2 卒業式の定番であった「ほたるのひかり」は、歌詞がなかなか難しい。

とくに最後の「いつしか歳もスギノトヲ、アケテゾ今朝は別れ行く。」というカタカナ部分は？です。

これに漢字を当てると、「いつしか歳も杉の戸を開けてぞ今朝は別れ行く。」となるのだそうです。

「過ぎ」に「杉」を掛け、「明けて」に「開けて」を掛けてあるようです。

こうした言葉によるあそびは、日本語の文化に大きな部分を占めています。

筆者のおやしギャグと駄洒落は周囲のひんしゅくを買っています。

でもこれは日本語ならではの知的でしゃれた言葉あそびだと自負しているからやめません。

筆者の駄洒落はともかく、日本の文化には、言葉や音に別の意味を込めるといったことがあります。

4や9を敬遠するのは昔からのことでした。

四(し)は死につながり、九(く)は苦につながるということからです。

また披露宴の司会者は、最後に「これで披露宴を終わります」と言ってはなりません。

お祝いなどのめでたい席の最後は「お開き」と言います。

終わるはめでたいことの消滅を招くということからです。

昔、言(こと)と事(こと)は同じだったのだそうです。

コトダマ(言霊・言魂)という言い方も残されています。

コトダマ・コトタマの考え方は、言葉と事の本質や実態は一体だという考えです。

また言葉はそれ自体に実態と意味があるという受け止め方です。

コトバは「事業」であり、「事端」であって、事柄の本質や実態と一体で、それを表すものだということです。

(このあたりは学問的な正確さと厳密さを欠いていますのでご容赦ください。)

このようなことによく似たこと(というと教会の先生に叱られそうですが)が聖書の中にもあります。

「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。」

これはヨハネ福音書の有名な書き出しです。

旧約聖書の最初にある創世記の書き出し部分にもこうしたことが見られます。

神様は「光あれ」と言われた。

するとそのようになった。

この繰り返しで、世界が造られたことが叙述されています。

言葉が発せられるとそれが事実になったというのです。

私たちの言葉はこれとはすっかりかけ離れたものになっています。

言葉は少しも実態を表しません。

「口ばかり」です。

子どもへのお母さんの口癖は「ちょっと待ってて」です。

でも子どもが待っていても、多くの場合その待ちは徒労に終わります。

「待って」はその意味でなく、「今はやれませんか」ということなのです。

「口約束」と言うくらい、言葉は当てにならないように見えます。

けれども実は、言葉の力は絶大です。

「グズ」「グズ」と言い続ければ、ちゃんとグズな人になります。

「ダメな子」「ダメな子」と言い続ければ、ちゃんとダメな人になります。

逆に「いい子」「いい子」と言い続ければ、その子のいいところが伸びてきます。

「君が好き」「君が好き」と言い続ければ、人を愛せる子になります。

言葉にはそういう力があるのです。

言葉は人と人の間であって、大きな働きをします。

子どもにどんな言葉を送るか、それによって子どもは変えられ、その言葉の方向に育って行きます。

「わたし(母)」から「あなた(子)」にどんな言葉を送るかは大きな問題です。

怒ってもいい、どやしつけてもいい。

それ以上に、心の中にある子どもへの肯定の思いを伝える言葉があればいい。

卒業生コーナー

12月14日(土)に卒業生のためのクリスマスをします。

近付いたら「卒業生のための園だより」でくわしいことをお知らせします。

今年もみんなでクリスマスを迎えましょう、楽しみましょう。